

# 栗郷土研究会報

No. 27

4 2. 4. 1  
 兵庫県栗郡  
 山崎町報  
 教育委員会  
 栗郷土研究会  
 電話 750番

## 千草鋼と長船鍛冶

備前景光・景政の場合

宇野正碓

(1) 現在、国宝に指定されて、その優秀性の点で特に有名な刀に、備前長船鍛冶、景光、景政の両名によつて鍛えられたものがあります。その時代は正中二年七月（西暦一三二五）のものと、嘉暦二年己七月（西暦一三二七）のもので二振あります。殊に栗郷に生れ住んでいるものにとつて興味深いことは、この二振が共に「播磨国栗郷三方西造之」という銘が刀の中心ナカゴ（刀の握りの部分）に記されていることとあります。この銘の意味は「播磨国の栗郷郡、三方西ノ郷一波賀町」で、これを造つた」ということと、このような逸品がわたしたちの郷土で、約六百四十年も以前に造られて、しかも現存しているということとは、郷土栗郷郡の大きな誇りであるといえましよう。

### 目次

千草鋼と長船鍛冶	宇野 正碓	1
庄 塚	島下八重子	5
平瀬長水の「射学要録」(一)	島田 清	7
兵庫県史料	黒田 義隆	11
予 告		11
会員名簿 (2)		12
雑 報		12

正中刀（正中二年の刀を略称する）の銘をみると、「八幡大菩薩、願主武蔵国 秩父郡 大河原入道 沙弥 藏蓮 同左衛門尉 丹治朝臣 時基」。「備前国長船左兵衛尉晃光 進士三郎景政」とありますし、嘉暦刀（嘉暦二年の刀の略称）の銘では「広峰山御剣 願主 武蔵国 秩父郡住 大河原左衛門尉 丹治時基」「備前国長船住 左兵衛尉景光 進士三郎景政」とあります。

右の二つの銘文の意味は、願主とは簡単にいうと注文主のことですから、正中刀の場合は、関東の秩父郡（埼玉県）



の住人、大河原蔵蓮と、丹治基の両名が、秩父八幡宮に奉納するため、長船（岡山県）鍛冶の景光と景政の両名に依頼して造らせたということ、嘉暦刀の場合は広峰神社（姫路の北部）に奉納するために、秩父郡の住人、大河原丹治時基が、景光、景政の両名に造らせたということ、

ここで注文主のことを考えてみますと、「大河原」とは秩父郡の郷名にもあり、地名をとつて姓としたものであります。又、「丹治」という姓は秩父地方の豪族で、陽成天皇の頃（西暦八七六〜八八四）、多治比真人武信が秩父郡に流され、その子孫に丹党（丹ノ党ともいう）を称した一族がありました。時基もその一族と考えられます。

秩父神社古文書にも、正和二年（西暦一三一三）の銘のあるものの中に「丹治行郷」という名も見えますので、丹党は丹治と同一ではなからうかと考えます。又、入道ニユウドウ沙シヤ弥ミとは武士で出家して僧名を名乗つたのでありましょう。この蔵蓮と時基の続柄は何であつたのでしうか。

正中刀では、共に秩父郡の住人ですが、続柄は明らかではありません。同左衛門尉という文と、奉納刀に名をつらねていることと考えて、常識的には他人と考えられないのです。しかし嘉暦刀では時基も明らかに大河原姓を称しているのですから親戚同志又それ以上と考えても無理ではないと考えます。次に中村家文書（波賀町有賀）では時基の法

名は莊蓮となつていたので、蔵蓮と莊蓮の関係は親戚以上、親子関係とみて蔵蓮を父、莊蓮（時基）を子と考えておきたいのです。

さて、蔵蓮、時基はどんな理由で宍粟郡の三方西ノ郷で刀を打たせたのでしうか。ただ注文を受けた備前長船の景光、景政が自分の判断で三方四郷で鍛刀したのでしうか。この考え方はなにか簡単に解釈しすぎるように思ふのです。

何らかの理由から、蔵蓮や時基が宍粟郡に来て住んでいたのでないでしうか。

辛いにこの疑問に答えてくれる鍵がみつかりました。その一つは、波賀町安賀の八幡宮の宝刀に次のようなものがあります。

「波賀上ノ方八幡宮為御劍、末代丹治大河原備中守之清、奉筆者也」「八幡大菩薩、備前国住長船次郎左衛門尉、勝光作、天文九年八月吉日」

石の刀銘の文は波賀の安賀八幡宮に奉納する神刀として子孫にあたる丹治大河原ユキヤコ之清ノキヨが、長船鍛冶の勝光に打たせたことを教えてくれます。

これで明らかになつたことは、丹治性と大河原姓が同一の家を示すことと、その子孫が二百三十年余後代になりませんが、波賀町に住んでいたことです。あまり他地方に知られていない安賀八幡宮に此の地の住人でない者が刀を奉納



するいわれがないからです。このことは、とりもなおさず祖先の葺蓮、時基は穴栗郡に住んだといえます。嘉暦刀の銘では「秩父郡住」となっているので矛盾をするのですが郷里が秩父郡であり、穴栗郡住となつてまだ多くの年代を経ていなかつたとも考えられるし、又穴栗に住んではいたが、本拠地ではないという事情も考えられます。

中村家の系図を引用してみることにします。家泰という人の項の説明によると

「本領 越中国石原村 武州秩父三山郷<sup>サンノヤマ</sup> 亀山院弘長年中播磨ニ違勅者 号波賀七郎光節 家泰在京 六波羅 応下知 発播州討波賀 依具功 播州三方 作州弓削庄内 公文賜」とあります。この文意は、家来の領地は越中一富山県一の石原村と武州秩父郡一埼玉県一の三山郷<sup>サンノヤマ</sup>にあつたが亀山天皇の御代弘長年間一西暦一二六一頃一に家泰は播磨で天皇の命に従わない波賀七郎というものがあつた、京都六波羅探題の命によつて播磨におもむき、波賀七郎を討伐しました。その功により、播磨の三方と作州一岡山県一の弓削庄の公文職を賜わつた。というのです。現在、波賀町上野に城山という城跡がありますが、波賀七郎はここに居城して攻められたのでしよう。伝説にも、波賀城主が名馬を所有していたが、献上をしなかつたので亡され、城主の姫が逃れる時、鮮血を雪の上に点々と残して捕えられた話を伝えています。このような事情で、関東武士がこ

の地に居を占めるようになったのでしよう。右の文中、公文職といつたのは、貴族、寺社が自領の荘園から年貢を収納するため現地に送り込んだ役人、この職務が公文職なのです。又、三方とのみかかれていたので、波賀町は三方西郷なので、その間に一致点がないのですが、三方を三方西の誤りと解して良い証拠があるのです。すなわち波賀七郎の住んだ波賀は、三方谷にはなく、旧西谷村一波賀町南半部一なのであり、更に家業の孫、光時に関係ある文書一中村氏文書一に、「可以早 中村馬允光時後家領知 播磨国



老松酒造有限公司  
電話四五五番

小野村在家寺字<sup>光国付田七段仕歩</sup>  
田参段 号御蘭 事

右以亡夫光時跡所配分也 守

先例可令領掌之状

依鎌倉殿仰 下知如件

正応三年八月二日

陸奥守平朝臣 判

相模守平朝臣 判

とあります。この意味は、光時が死んだので、その遺産配分により小野村にある家屋一軒と、田七段廿歩と田三段とは「御園<sup>ミソ</sup>一今の溝野」と呼ぶ先例に従つて、未亡人の所願とせよと將軍より命令があつ



たので、早く未亡人に管理させなさい。ということなのですが、小野村も溝野（引原川東小野村の小字）も波賀町でありますから、三方西郷（波賀町）に住んだことは、明言できると考えます。

以上こまごまと述べました事の要点は、正中刀、嘉暦刀の注文主は、関東武士が鎌倉幕府の発展と共に西日本に進出し、その中の一人として大河原氏（中村氏が宍粟郡の北部山間部まで移り住んだことが立証しなかったに外ならないのです。他の例をあげますと、一宮町安積に居て勢力のあつた安積氏も、東北（福島県）からこの地に來住したのです。

(注)①播磨国安積保下司文職并三方西郷文職姫道村田島等

知行：：貞治三年（一一三六）—一三六四—||大日本地名辞書よ

次は備前の刀鍛冶、景光、景政のことですが、この二人は兄弟説、親子説もあり、また景光には三代あつたといいますが、明らかではありません。おそらく長光の子景光（初代）のことでしょう。この二人が何故宍粟郡に來たのかをいいますと、宍粟郡が刀の原料の鉄産地であつたからなのです。大体読者もご存知のように、日本では古來砂鉄から鉄を採取し、製鉄をしたのですが、宍粟郡の西北の岡山県境の千種町西河内（東河内）河呂（岩野辺）波賀町齊木（飯見）、皆木（上野）一宮町深河谷（生栖）染河内谷と、

やや東南方向にかけての帯状の一带は石英閃緑岩の地帯で特に地表部に近いところは腐蝕しているのです、ここから砂鉄が採取できたのです。宍粟郡の製鉄の歴史は非常に古くすでに播磨風土記に載っているのですから、千三百年の歴史があるといえます。

そののちは、文献を欠いているので詳しいことはわかりませんが、平安時代（一一条天皇の頃西暦一〇〇〇年末）には、家時とその（グループ）の刀鍛冶が宍粟郡に住み、細手の刃を鍛えるのに特長としていたことも知られます。何時の頃から宍粟鉄（千草銅）の名が備前にまで伝わるようになったか、長船鍛冶の鍛刀の原料となつていたので、刀工もしばしば鉄を求めて來郡したのでしよう。景光、景政もこのような事情で吉井川をさかのぼり、美作国（ミササカ）から播磨国に山を越えて入り、今の千種町から波賀町の齊木、上野方面に旅を続けては良質の銅を尋ね求めていたのでしよう。上野付近ではその地の勢力家である大河原氏（中丹治氏）を訪れて何かと便宜を与えられていたのでしよう。推測の域をでないのですが、大河原氏は砂鉄採集（かん）一流（な）やたたら製鉄や鉄の販売の実権を握つていたのではないかと考えられますしあるいはここに滞在して良質の鋼の生産されるのを待つていたのではないでしようか。

そうした時は、依頼されればいつも鍛刀していたが、たまたま大河原氏の出身地の秩父八幡宮の造営が完成したの



で、正中二年にはその依頼で精魂こめて正中刀を鍛え、次に嘉暦二年には前にならつて、広峰神社に奉納するための嘉暦刀の作製ということが行なわれたのではないでしようか。

その後も、長船鍛冶の来訪は次々あつたが、天文九年には勝光が、安賀八幡宮奉納のための刀を鍛えたのではないでしようか。

別の考えとしては、大河原氏が刀を打たせるために当代の名手である景光、景政を呼び寄せたとも考えられますが、赤松氏再興後の赤松政則は播磨の領主で勢力があつたので備前長船の刀鍛冶を呼んで自ら鍛冶している例もあるのですが、大河原氏の場合、どれ程の勢力があつたかといえは三方西ノ郷程度にすぎないので、わざわざ呼ぶようなことはなかつたとも考えられるのです。

果してどちらでしようか。確かな立証材料がない限り何んとも言えないのが真実だと考えますが、長船鍛冶が鉄産地へ原料を求めて訪れたことも真実でしようし、その刀工を普段から自己の権勢の下で世話をし面倒を見て、刀工に誠心誠意作刀に没頭させるだけの素地を大河原氏が作つていたことを無視するわけにもゆくまいと考えます。

以上要するに、地質的に砂鉄産地の六栗に、武勇にすぐれた関東武士が移住して来たことによつて、備前長船の刀鍛冶に後世に残る名品を作らせたこと、三者混然一体とな

つたところに名刀が誕生したのでしよう。

(一四二、一、二二稿)

# 庄 塚

島下八重子

女は業わざなもので、老いて目がうとくなつていても、華やかで柔かい布を見るとつい縫つてみたくなり、針持つことも多いが、びんとしごいておいても、とかくこの頃は糸に不必要な結び子が出来やすい。指も仲々意の尽には動かすも、もう駄目だなとひそかにため息をついていたが、或る夜更け、はるかかな人をふつと思ひ出して、心が明るくなつた。それは庄境のおばあさんと呼んでいた大伯母のこと、十二才の私に糸のとり方を丁寧に教えてくれた人である。「糸巻にきれいに並べて巻きなされよ。乱雑に巻いたら行





山崎の松葉

# 篠丸 十二波 松月堂

山崎本行 巻六一

儀が悪いと人様に笑われますでな」と、白い小菊の描かれています。板の糸巻を手渡してくれた老女、真向いに坐つて萌黄の糸を両手にかけて、ゆつくり私の手許をみつめていた。柔和な顔：今は機械がカードに巻いた糸ばかり多く売られるので、あんな愛情のこもつた動作に会つたことのない糸は、時折すねたようにダンゴになつて困らせるのであるうか。

あのおばあさんには、又鏡仕立てのふとんの縫い方を教えてもらつたな：：と思ひ出したり、祖父の遺体を清めながら、「若いときにはきれいに髪を結うてあげましたのになあ」とほろりと涙したことを夢のように思ひ出した。りしていると、いつしか心は遠い庄境へ行つて、あのお薬師さんの境内に咲いていたのは緋桃の花であつたらうか。傍を流れていた小溝の水は、大伯母の家の庭先で菜など洗わせて、又大川の方へ向つていたなと思ひうかべたりして、いつしか心も澄むようであつた。おばあさんの性も千

本、私の姉が大阪鞆の鯉節屋へ嫁入るとき、「母親の実家が千本屋村の千本というのでしたら別伏おますまい」と、姑になる人が變に信用したと後日義兄が笑い話のようにいつたが、昔、一門の人々と村人との間はそもどのようであつたのだらうか。

揖保川の水を愛してその流れの見える船元の墓場へ、山崎の侍墓地にあつた先祖の墓を姑の反対を押し切つてまで移した母が、竹林の側を廻つて、生家の墓地を訪ねるときは、どうしても庵寺の關伽桶を借らねばならなかつたのは皮肉であるが、澄み切つた水を存分に汲んで、お菊虫の由来など聞きながら川傍の道をゆく気分は悪いものではなかつた。

關伽桶の中を覗きし一輪は墓への道のなでしこの花と、私もその墓地には何か惹かれるものがあつて好きであつた。通達院釈善趣、普照院釈広濟と祖父や叔父の戒名を刻んだ石があるばかりでなく、おほろにこけしのような人型を彫つた小さい小さい墓もあつて、それが麻疹で死んだ童児のであると聞き、いとしく思う故為でもあつた。又千本屋村中として明治四十一年に千本孫十郎君の碑が、大正三年に千本龜治郎君の碑が建立されて、その側面の句

幾千代も匂へこの花このいさを  
むらに名を残すほまれや白ぼたん



とたどり読むのも、何かほのほのと心が明るむからでもあつた。いつの世にも反対する人はあつたろうけれども、とにもかくにも村中から墓を建ててもらつたといふことは、冥するに足ること、仏も本望であつたらうと思ひ、梅の香、ぼたんの姿を石に籠めた村人の風雅が床しいものに感じられるのだつた。

庄境のおばあさんにしても、言葉の美しい人で、年少の私もお前などと呼ばれた覚えはない。墓参りの帰りに寄ると、春なれば大抵色どりの美しいあられを白紙に包んでくれたし、「お口に合いましよかな」といいながら野菜の味噌漬を添えてくれることもあつた。大根、胡瓜はうに及ばず、香りの高いごぼうやにんじんもあつたが、一番好きだつたのはべつこり色になつた豆で、辛いながらも底にあたたかい甘味があつて、その歯ざわりのさわやかさが、だらけた気持をしやんとさせるようであつた。今も思えばすうりとした後姿が目に見えて、あねさまあねさまと慕つた祖父の声も甦るように思えるおばあさんの住んでいた庄境、お薬師さんにも心明るむ由緒があるのでなからうか。急行バスの走る大道が近くに出来ても、境内の花は今も咲くのであるうか。歳月は人間の諸悪を忘れさせてくれるのと同じに、墓石の字さえ日々薄れさせて、床しくなつかしいものもだんだん減ほしてしまふようである。貴重な紙面をお借りして私事を書いたのも、和やかたつた村

を語りたいため、失礼お許し頂ければ幸甚である。

# 平瀬長水の『射学要録』

射学要録 序

鳥田 清

蓋し、射の起るや尚し。而して其の用たるや広し。乃ち文、乃ち武、射それ背かざるかな。夫れ明君上に興り、文教下に隆なるときは、則ち揖讓興舞の容、心志和易の実、射、これにおいて之を觀る。鉄を閨外に授け、愾を四方に敵するときは、則ち、穿甲破胆の威、飛機通情の術、射、これに於いて之を取る。故に、射の術たる、文事の射あり、武備の射あり、而して世の射を言う者、屑然として相踵ぎ、家その道を神とし、人その説を秘として以て一世に相高ふ

春

広用士紳  
ボンズ替

心地の良い  
コクラン  
洋ぶとん  
マットレス

寝

山崎町西町

とりしや

TEL.6107



る。抑々、その觀德敵愾の用に至つては、則ち髣髴として  
 統る所なし。是を以て、射の術、日にその真を失す。甚だ  
 しきは賭して中を争い、以て利を鉤るの器と為すに至る。  
 亦、何ぞ自ら汚がすの甚だしきや。嗟乎、洗風の靡注する  
 ところ、錯て習俗の相施易する、それ之を何とか謂はん。  
 平瀬光雄、此に慨然たること有り。彼の百家の説、これを  
 用に質し、其の底蘊の実、これを古に稽う。之を琢し、之  
 を磨し、益々その精を研く。久うして已まず。神と化す。  
 之、所謂、揖讓興舞の容、心志和易の実、穿甲破胆の威、  
 飛激通情の術、身その室に入り、目その奥を觀る。照然と  
 して一二を数ふるが如し。夫れ既に之に入る。是を以て其  
 の言霰なり。夫れ既に霰なり。是を以て其れ之を聞くや曉  
 し易し。其れ之を伝うるや達し易し。古の善く教ゆる者は  
 平瀬氏それ庶幾んか。余、少くして金張の言を好み、旁ら  
 弓矢に及ぶ。今や、逢衣淺帶、猶かつ此の書に扼腕なきこ  
 と能わず。乃ち、數言を以て其の首に弁すと云うこと爾り。

品化粧堂生資  
 料材藝手

あこや



町4  
 本TEL

天明戌申春正月

射学要録 目錄

東肥 本田真郷 印

(原漢文)

上卷 射学心得之部

- 一、弓矢始り、諸流派の事
- 一、教導ニ精疎アル事
- 一、射ヲ学ブニ本末アル事
- 一、弓矢長短輕重ノ事
- 一、軍射、堂前的前ニ射具差別ノ事
- 一、堂前稽古是非ノ事
- 一、弓鉄砲利用差別ノ事
- 一、五射六科ノ事
- 一、射形実射、表裏差別ノ事
- 一、主将、士卒ノ射ニ差別ノ事
- 一、鶴ノ大小、物間遠近ノ事
- 一、堂舎当日是非ノ事
- 一、引目鳴弦ノ事

下卷 軍射器械之部

- 一、軍射持弓ノ事
- 一、軍弓筈合ノ事
- 一、軍弓鈞ノ事
- 一、軍弓弦ノ事
- 一、數弓ノ事
- 一、軍弓腕貫ヲ附ル事
- 一、体ノ矢ノ事
- 一、軍弓彩粧ノ事
- 一、弓、音アルヲ好ザル事
- 一、軍弓附革ノ事
- 一、弦卷・弦袋ノ事
- 一、教弓塗様並弓符ノ事
- 一、矢入ノ箭ノ事
- 一、軍箭ノ事



- 一、鏃スケヤウノ事
- 一、矢印書様ノ事
- 一、数矢ノ事並矢束結様ノ事
- 一、矢文ノ箭ノ事
- 一、火矢ノ事
- 一、空穂ニ刺矢並納べき物ノ事
- 一、打鏃ノ事
- 一、雨中、弓矢篠ノ事
- 一、空穂ノ事
- 一、矢籠ノ事
- 一、並矢棚ノ事
- 一、矢保侶ノ事
- 一、女板・男板ノ事
- 一、決拾並早篠附緒留ノ事
- 一、女板ノ事
- 一、弓矢寸尺ヲ縮メ用ル事
- 一、著具ノ事
- 一、射士、甲冑ニ泥サルベキ事

雑之部

- 一、甲冑シ、弓持タルトキ、礼容ノ事
- 一、主君ノ鎧、同輩ノ著具、矢試作法ノ事
- 一、射貫物ノ事
- 一、射貫葉ノ事
- 一、居者射様ノ事
- 一、召捕者射様ノ事
- 一、川沼ニテ射様ノ事
- 一、水底ノ物ヲ射ル事
- 一、床下射様ノ事
- 一、根上リ射様ノ事
- 一、屋上ヨリ射様ノ事
- 一、生垣ヲ射ル心得ノ事
- 一、山野ノ矢ノ事
- 一、拳詰行連四方棚ノ事
- 一、柄惜ミ、隠家筈惜ミ、四寸ノ矢而木鋒一発ニ矢多ク射様、ソギ筈、弦切一度射様ノ事
- 一、無力強弓ノ事
- 一、艦武者討取、実檢ノ事
- 一、弓矢、竹虫入ザル習ヒ、鏃手置並研磨ノ事

- 一、毒矢ニ中タルトキ、洗葉、並鏃又キ葉ノ事
- 一、造リ物ヲ以テ矢ニ替ル事

馬上射事之部

- 一、弓持テ馬ニ乗様ノ事
- 一、馬上ニ弓持様並持セ様ノ事
- 一、馬上ニテ弓納メ様ノ事
- 一、馬上ニテ弓張様ノ事
- 一、馬上ニ弓持テ茂ミヲ行時ノ事
- 一、馬上弓持テ川ヲ渡ス時ノ事
- 一、馬上六曲ノ事
- 一、馬上矢番並早番ノ事
- 一、馬上ヨリ射処目附ノ事
- 一、馬上ニ弓持テ茂ミヲ行時ノ事
- 一、馬上ニテ弓張様ノ事
- 一、馬上弓持テ川ヲ渡ス時ノ事
- 一、馬上矢番並早番ノ事

夜軍射事之部

- 一、夜討・夜得ノ弓矢ノ事
- 一、夜討入タル時ノ事
- 一、寝所ノ弓ノ事
- 一、夜ノ弓アテカヒ並目附ノ事
- 一、夜中矢声ノ事
- 一、夜討ニ証ノ矢建様ノ事
- 一、夜討ニ火矢持ベキ事
- 一、松明篝ノトキ弓ノ事
- 一、夜軍弓鉄砲前後ノ事



山交タクシ

乗り心地よい新車  
デラックスで親切安全

TEL. 166・930



別 詔 調 進  
貸洋服も致します

# 片山洋服店

本 町 (電三三九)

## 船軍射事之部

- 一、潮汐之事
  - 一、船ニ乗得又人ノ事
  - 一、船中楯ノ取扱ノ事
  - 一、敵ノ退船射様ノ事
  - 一、追来ル敵船射様ノ事
  - 一、船中軽卒弓立様ノ事
- 狭間射事之部
- 一、狭間切様ノ事
  - 一、狭間戸ノ事
  - 一、鉄砲狭間ノ事
  - 一、狭間糍ワラノ事
  - 一、狭間ニ弓立様ノ事
  - 一、狭間一ツヨリ弓幾張モ射様ノ事

- 一、脇楫倒槽ワキカサノ事
  - 一、船中弓ト槍持ベキ事
  - 一、船ノ傾ニヨリ矢所違ノ事
  - 一、敵船ノ帆並帆繩ヲ射切ト云事
  - 一、水主・楫取ヲ射ル事
  - 一、船ニテ軽卒、弓射サセ様ノ事
- 一、獅子口ノ狭間ノ事
  - 一、狭間ノメンヲ取事
  - 一、格子狭間ノ事
  - 一、狭間射様ノ事
  - 一、二重狭間射様ノ事

- 一、狭間下 射様ノ事
- 一、壕向ノ敵、射様ノ事
- 一、矢倉下射様ノ事
- 一、山手ノ城ニ寄ル敵並切岸下射様ノ事
- 一、敵城ノ狭間ヲ閉ル事

## 将士心得之部

- 一、輕卒弓ノ事
  - 一、輕卒 弓納サセ様並弓砲両用ノ心得アルベキ事
  - 一、弓備立様、射サセ様ノ事
  - 一、細道弓備射サセ様ノ事
  - 一、川越ニ弓備立様、射サセ様ノ事
  - 一、川端ニ弓備立様ノ事
  - 一、坂下弓備立様、射サセ様ノ事
  - 一、夜軍弓備ノ事
  - 一、船軍弓立様ノ事
  - 一、鎗前輕卒弓射サセ様ノ事
  - 一、懸引ノ矢射サセ様ノ事
  - 一、退口輕卒弓ノ事
  - 一、奸ニ逢タルトキ輕卒弓ノ事
  - 一、矢声得失ノ事
  - 一、輕卒 夜ノ弓アテガヒノ事
  - 一、輕卒矢印ノ事
- 一、弓鉄砲備ノ事
  - 一、弓備心得ノ事
  - 一、滑道ニテ射サセ様ノ事
  - 一、森林ニ敵アルトキ弓備ノ事
  - 一、火矢ヲ射サストキ弓備ノ事
  - 一、物前弓備、分合射サセ様ノ事
  - 一、輕卒相弓射サセ様ノ事
  - 一、返シ合ス敵、射サセ様ノ事
  - 一、輕卒繰引ノ事
  - 一、輕卒ノ声ニ用捨アル事
  - 一、横矢用捨ノ事
  - 一、輕卒夜中矢声ノ事
  - 一、輕卒火矢射サセ様ノ事







# 雑

# 報

◎ 遅延していた郷土館の開館式は、四月四日に挙行されました。町が自主的に郷土館を設立することは、県下で最初のケースです。次に現在の陳列品も時々交代の必要があると思えますので、皆様が古くご保存の郷土に關係ある、各種の珍らしき物を御出品下さるよう希望いたします。

◎ 宇野正磯氏は「近世千草鉄山史料」(上)をこのほど刊行されました。B六版、二二八頁、史料六十一項目、貴重な資料が蒐集されていて、やがて刊行される下巻が期待される。

◎ 県立山崎高校地歴班は、「地理歴史研究」第十四号を発行、表紙に關齋木像の画を使用して、本文四〇頁。宍粟郡内の金石文めぐりなど、注目すべき記事が多い。

◎ 遠藤島生氏は、昨年から「山崎新聞」誌上に郷土ものごたりを連載中だが、目下「鹿沢城物語」を詳細に毎号発表。博く史料を求めて、単なる物語でなく、教えらるるところが多い。完結の上は一本にまとめられて刊行される日を楽しみにしたい。

◎ 橋本米一氏(山崎町青木)の近作古木彫刻作品展覧会は三月二十日から三十日まで山崎町伊藤画廊において開催。好評であつた。

◎ 太中道節氏(本郡一宮町生)の近作書展は、三月二十三日、二十四日千種町研修所。二十六日、二十七日一宮町南

中学校、二十九日、三十日山崎町下村記念館で開催。古硯、古墨、印材なども陳列された。同氏は、日本書道院の審査員である。

◎ 本会の春季見学旅行は、来る五月十四日の日曜と決定。岡山方面に出かけます。いずれ詳細は、別紙案内伏差上げますからご協力下さい。

## 会員名簿 (22)

金	谷	田村	教二	三	津	山本	みよ子
"	"	長谷川	清	"	"	東	とみゑ
西	鹿	沢	長井	"	"	田中	まさ子
"	"	松下	君子	"	"	東	みさを
"	"	"	"	"	"	東	ゆわの



### 寿

先づ陳列品をご覧下さい  
久保タンス店

山崎町本町 (電話七番)